

東部戦線南翼の崩壊



＋「増援か、後退か」をヒトラーにせまる マンシュタイン

1943年8月27日、ウクライナの西部にあるウィンニツァの森の中で行なわれていたヒトラーとドイツ南方軍集団首脳との会談では、緊迫したやりとりが続いていた。

7月の半ば以来、ドイツ南方軍集団戦区は、絶え間のないソ連軍の大攻勢にさらされていた。ドネツ地区の中心ハリコフ市をめぐる戦いは、8月初から中旬にかけて未曾有の規模で展開された。ラウス將軍指揮下でハリコフ防衛にあたったドイツ第11軍団は、救援に送られた第3機甲師団と協力して、ソ連ステップ方面軍の精鋭＝ロトミストロフ中将指揮の第5親衛戦車軍を相手に一歩もひかない奮闘をした。

8月19～21日にかけて、数次にわたる150～200輦規模のT-34戦車の攻撃を、同部隊は市郊外のボレヴォエ村周辺で全て撃退し、ソ連第5親衛戦車軍の持っていた戦車のほとんど全てといえる500輦ものT-34を攻撃する奮闘ぶりであった。

しかし、こうした戦術的勝利にもかかわらず、ハリコフは8月22日に明け渡さなければならなかった。急速に損害を補充するソ連軍に対し、ドイツ軍部隊には補充がほとんどなかったためである。

「総統、わが南方軍集団はここ数カ月の激戦で13万3000名を失いましたが、補充されたのは3万3000名です。ホリトの第6軍はクルスク戦後から8月にかけて2万3830名失い、補充は3312名のみ。マッケンゼンの第1機甲軍も同時期に2万7291名を失い、補充は6174名……」

マンシュタイン元帥が説明するテーブルに広げられた作戦地図には、ソ連軍の戦線突破を示した赤い矢印があちこちにつけられていた。

「現状では、ドネツ地区を放棄していただくか、12コ師団以上の兵力を緊急に増援していただくか、道は2つしかありません」－マンシュタインの勇氣ある説得に、「戦争経済上の利益のため、ドネツの工業地帯と石炭の死守」を主張していたヒトラーも反論できなかった。

「増援を送る命令を出す」と言いのかして、ヒトラーは東プロシヤに戻っていった。

＋戦線各所を突破するソ連軍

クルスクの戦い以後、休みなく戦い消耗してきた南方軍集団は、ドニェプル川上流からアゾフ海にかけて約1000kmにわたる戦線を維持していた。絶え間ない戦闘で兵力の減った各部隊は、戦線1kmあたり80～100名の兵しかもたなかった。

その薄い戦線を、マンシュタインらは何とか快速機甲部隊の運用による機動防禦で維持しようとしたが、もはや限界であった。ハリコフ占領後、ドイツ南方軍集団戦線の各所に、ソ連軍は圧倒的な兵力をもって総攻撃をかけた。

ミウス川がアゾフ海にそそぐタガソログ周辺を守っていたドイツ第6軍の第29軍団の兵力、8700名余。そこへ、トルブーヒン大将指揮のソ連南方面軍の第2親衛軍と、第5突撃軍合計7万名の兵力が襲いかかった。

ミウス河畔のクイビシエヴォに突破口を開けたソ連軍は、歩兵の大群とT-34戦車を投入して南進、第29軍団

ソ連軍、ついに ドニェプル川を 渡河！

古是三春



の包囲をめざした。マンシュタインは、クリミア半島のA軍集団から転属された第13機甲師団、第259突撃砲旅団をこの突破口に向けて反撃したが、突破口が広がるのを防ぐことはできなかった。

いまや小戦隊となったドイツ軍部隊の横を、洪水の奔流のようにソ連軍部隊が通りすぎてしまうのである。優れた技量のドイツ戦車兵、突撃砲兵たちは、III号戦車、IV号戦車、III号突撃砲をもって多数のT-34を撃破したが、次々と新手を繰り出すソ連軍に弾薬も尽きてお手上げ状態となり、自らが包囲に陥らぬよう退却せざるを得なかった。

ドイツ歩兵の機銃陣地も、「ウラー！ウラー！」の地を揺るがす叫びをあげて突進してくるソ連歩兵をMG42重機の掃射で何度もなぎたおしたが、ソ連側の攻撃は尽きることなく続く。「やつらの人口は無限なのか？」

このまったく非人道的といえる「人海戦術」は、確かにソ連の人的資源を大幅に減らす原因となったが、当時ソ連の下級部隊の戦術レベルでは、他に有効な攻撃戦術がなかったのだ。そのことを理解していたソ連軍の各司令官は、ドイツ軍を撃退して「解放」した土地から兵役に耐える住民をどんどん徴募していった。14～15歳の少年から60歳前後の農民まで！ドイツ第29軍団を攻撃していたソ連南方面軍は、8月の3週間で8万名もの兵力をこの方法で加えた。

この戦いつつふくれあがるソ連軍に対して、陣地をもちこたえることはできなかった。8月末には第29軍団は完全に包囲され、残余の部隊は重装備を捨て、個々に囲みを破っていかざるを得なかった。第111歩兵師団長の

レックナーゲル中将は、残余の兵と共に着剣したモーゼル小銃を手に包囲突破集団の先頭に立ち、アゾフ海沿いをマウリポリ方面へ脱出した。途中、何度もロシア兵と白兵戦を交えながら……。

マンシュタインは、東プロシヤの総統大本営にとび、ヒトラーに対して東部戦線の指揮を別の者に委ねることと、戦線短縮のための後退を求めた。ヒトラーは、8月27日に約束した増援を、まったく行なわなかったのである。

9月3日の会談で、ヒトラーは第6軍をミウス川から「亀陣地」に後退させること、A軍集団の第17軍をクバン半島からクリミア半島に撤退させることを承認した。「それ以上の後退は認められない！他の戦線からも増援は送れない！余の他に東部戦線司令官は置かない！」。

この日、イタリア本土に連合軍が上陸した。

その3日後に、ソ連南西方面軍（マリノフスキー大将）もドイツ第1機甲軍と第6軍の間を突破し、「亀陣地」北部を蹴散らした。突破の先鋒に立っていたソ連第23戦車軍団は、ドイツ第23機甲師団、第16機甲擲弾兵師団に捕捉され、9月12～13日には何とか動きをストップさせられた。

同時期に北からソ連中央方面軍（ロコソフスキー大将）、ヴォロネジ方面軍（ヴァツーチン大将）、ステップ方面軍（コーネフ大将）も各戦線を突破、ロコソフスキー軍

ソ連軍ジューコフ元帥（左）と、ドイツ南方軍集団総司令官マンシュタイン元帥





泥に足をとられるⅢ号突撃砲G型

はキエフ東方100kmのボブロヴィツァまで進出、ヴァツーチン軍もドイツ第8軍の戦線をアハツィルカ北方で迂回し、ドニェプル支流のウダイ河畔まで前進するなど、ドイツ南方軍集団は北翼から崩壊の危機にみまわれていた。

✦ヒトラー、ドニェプル川西岸への後退を承認

「敵55コ師団、戦車2コ軍団がわが軍集団を攻撃。ここ南方軍集団戦区で敵は決戦をいどむつもりです。新兵力の緊急派遣、ないしは短縮した有利な戦線への撤退をもとめます」——マンシュタインの緊急電報をうけとったヒトラーは9月8日、ドニェプル湾曲部南岸のザポロジェにある南方軍集団司令部にとんだ。

同じ頃、ジューコフはスターリンに対し、南方軍集団北翼攻撃の主力となっているヴォロネジ、ステップ両方面軍に対し、戦車の大々的増強を要請していた。ソ連大本営代表として、クルスク戦以来ヴォロネジ、ステップ

両方面軍の作戦調整にあたってきたジューコフ元帥は、「南方軍集団を北翼から突破し、包圍殲滅するチャンス」だとこの情勢をみていた。

ジューコフの意向をうけ、ドニェプル川への追撃戦にあたりヴォロネジ方面軍はソ連大本営予備から猛将リュバルコ中將率いる第3親衛戦車軍、第61、52軍を増強され、ステップ方面軍は第37、46軍を増強されたうえ、第5親衛軍を配属された。

これらの部隊は、すぐに戦闘に投入されドイツ軍防禦戦線にあいた突破口をさらに広げ、後方に進入しはじめた。そして、矛先をドニェプル川に向けて突進を開始した。スターリンが9月9日付で特別命令を発したのだ。「ドニェプル川に到達した部隊の指揮官には、ソ連英雄の称号を与える」。

9月8日の会談でヒトラーは、撤退するかわりに4コ師団の増強を行なうむね言明し、中央軍集団に対し第4、



奪回したハリコフ市内で、対空機関砲を設置するソ連兵

第8機甲師団と歩兵2コ師団を南方軍集団に配置がえするよう命令した。しかし、この命令は新たな大攻勢をソ連軍からうけていた中央軍集団司令官クルーゲ元帥から拒否された。

マンシュタインは、再度ヒトラーに打電した。

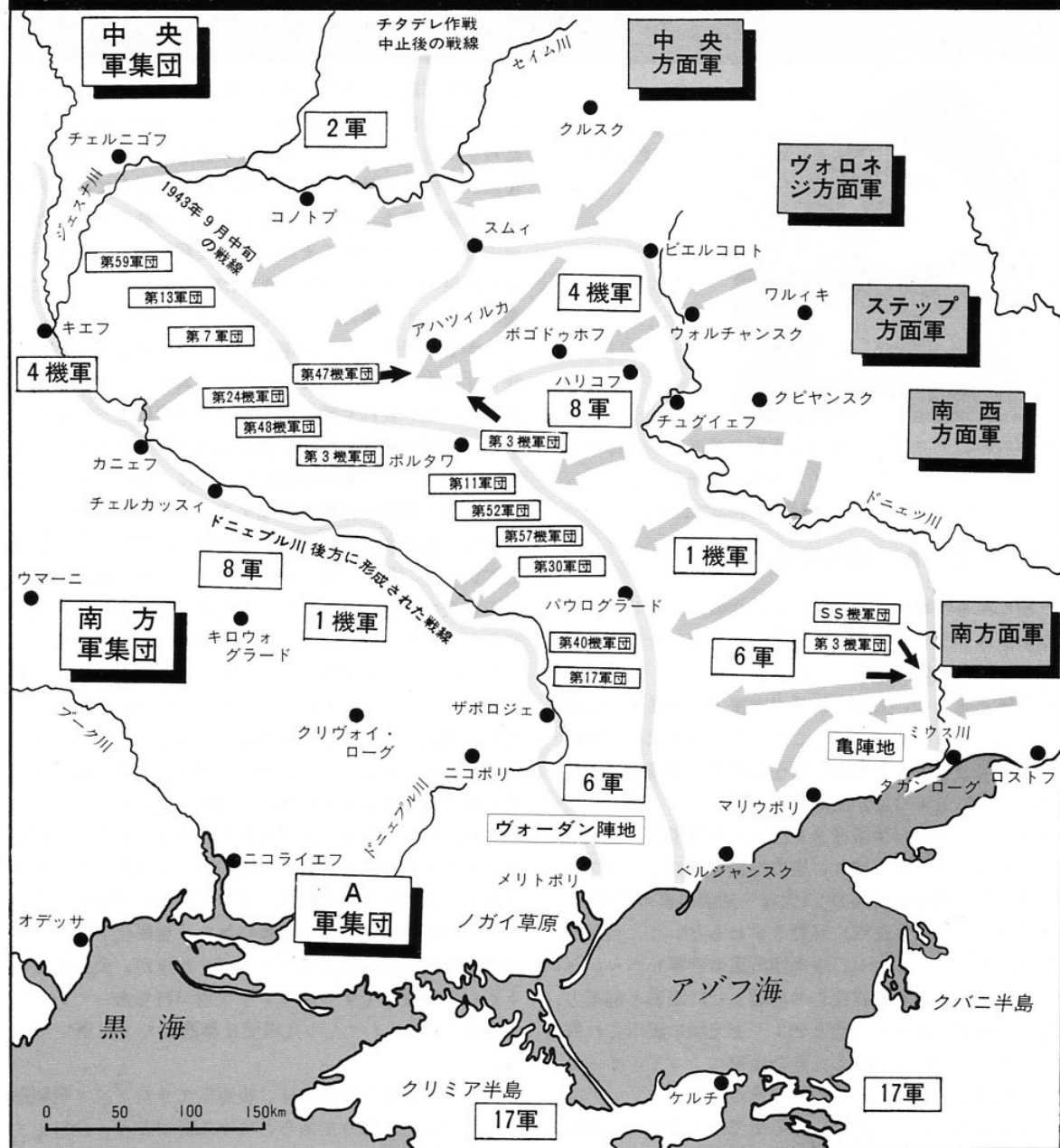
「ソ連軍のドニェプル進出という破局を覚悟されたい一情勢により必然となった兵力増強が早期に行なわれていたなら、東部戦線、ひいては戦争全体の命運を決しか

ねぬ現在の危機はさけられていたであろう」。

「敵軍がクレメンチュークとキエフに侵攻するのは時間の問題。本官は、第4機甲軍に対し、キエフ南北のドニェプル川西岸への撤退を命令する」。

ヒトラーもついに折れた。ドイツ南方軍集団主力は、ドニェプル川に向けて撤退を開始、西岸に陣地構築をすることとなった。1000kmにも広がった戦線を混戦の中でたたんで、すみやかに数カ所の渡河点に後退するのだ。

東部戦線南翼の戦い(1943年7月17日～9月30日)



T-34を先頭に突撃をかけるソ連歩兵。戦力が先細るドイツ軍に対して、ソ連軍は戦いながら増強されていった。



ソ連軍は、解放した地域の子供から老人までを徴兵した

第6軍のみ、ドニェプル湾曲部南岸のザポロジェからメリトポリを結んだ「ヴォーダン陣地」を守ることになった。「クリミアへの連絡路」確保のためである。

十汚名を残した「焦土作戦」

一般に軍事作戦行動の中で、撤退作戦ほど難しいものはない。ふつう作戦行動中、撤退をもとめられる状況は圧倒的に優勢な敵の攻撃下に起こる。しかも、戦闘力のある部隊とともに、大規模な後方支援・補給部隊をも確実に後退させる必要がある。これら巨大な部隊を、戦場から逃れようとする避難民が右往左往する地域をぬって整然と行動させるのは、至難なことである。

マンシュタインが後退命令を出した9月半ばは、ドイツ南方軍集団の戦線が崩れ、後方地域にはジューコフ元帥が放った「機動遊撃兵力」（大隊～旅団規模のT-34と戦車搭乗歩兵の独立部隊）が動きまわるという、大混乱の状況であった。しかし、軍集団所属の各軍レベルから師団レベルにいたる参謀たちの卓越した計画力と洞察力、それに「迅速な機動を可能とせよ」と元帥に訓示され数カ月の戦いでそれを実践してきた経験によって、まったく見事なほど、退却行動は円滑に進んだ。

まず参謀部では、中隊にいたるまでの各部隊の後退経路を綿密に検討した。そして、迅速な移動を可能にする

道路補修部隊を各所に計画的に配置、さらに部隊通過後には道路、橋、鉄道を破壊する工兵と資材の確保もおこなうに行なった。第一線部隊の撤退は、特に慎重に行なわれ、撤退初動は、一気に長距離を移動して敵側の捕捉を困難にする。後退行動は、各中隊が独立して行ない、途中でぶつかる困難もそのレベルで解決する。下級将校の指揮能力と将兵の練度が世界的な水準からみても大変高かったドイツ軍だからこそ、可能な行動であった。

しかし、同時にドイツ軍部隊にとって後世まで汚名を残す「焦土作戦」も、この時初めて大々的に実施された。持ち去れない食料や敵の宿営となる家屋はすべて焼きはらい、井戸を埋め、住民を連行した——マンシュタインをはじめ、ドイツ軍司令官たちは後に「補給を現地調達にたよるソ連軍の行動を遅延するための、必要最低限の措置」、「住民の多くは自発的に移動を希望した」と説明しているが、最近、旧ソ連のプロパガンダの論評とは無縁の状況で明らかにされている史実によれば、そんな生やさしいものではなかったことが明白になっている。

多くのドイツ戦闘部隊は、「焦土」の実施について消極的であったが、「特別コマンド」と後方部隊は熱心にこれを実施し、農作業中の農民から通行人にいたるまでいっせいに「人狩り」を行ない、移動拒否者や逃亡者はその場で射殺するなどの過酷な措置をとった。

また、マンシュタイン司令部の「焦土」命令とは別に、出されたウクライナ統治行政当局の「ソ連邦の国家財産であったと見なされる物は、すべて徴発して持ち去ること」との布告は、不法な略奪行為を「合法化」した。キエフ郊外地区を解放したパルチザン部隊が、公共施設のトイレの便器まですっかりドイツ軍が持ち去っているのを発見し、「ドイツ人の几帳面な徹底ぶり」に驚いている。

これらの非道な行為には、後退してきたドイツ戦闘部隊の兵士たちも怒りをあらわにする者が多く、食料をすべて取り上げられた残留住民に少ない携帯食料をわけ与

え、「俺たちは、ギャングを養うために戦争しているんじゃない」と嘆いたという。

確かに「焦土」戦術そのものは、元祖的にソ連軍が用いてきたものだが、侵攻した軍隊が他国領土で行なえば、汚名を着ることはまぬがれない。「ソ連軍の徴兵を逃れるため、住民が移動した」云々についても、移転させられた住民の多くは労働力不足に悩むドイツへ送られ、奴隷同様の扱いで農場や工場の労働に就かされ、ほとんどは生還することがなかった。これらの事情は、他の地域に比べ反ソ親独的だったウクライナ人の多くを敵にまわす以外のなにものでもなかったようだ。

いずれにしろ、1000kmにわたる戦線からの後退行動は、重要資材や兵力の損失も最小限にとどめることになった。

しかし、最後の瞬間は緊迫したものとなった。ドニエプル河畔への到着が、ソ連軍先鋒部隊とほぼ同時であったからだ。

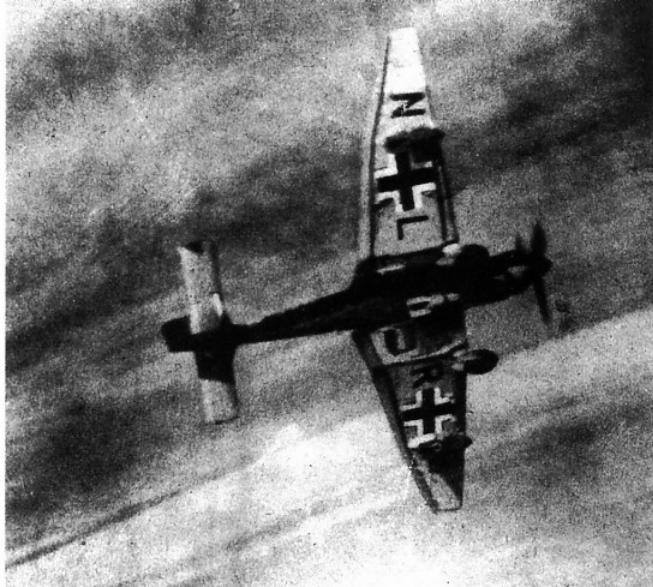
＋ソ連軍、ドニエプル渡河に成功

ドイツ南方軍集団の各軍部隊は、合計6カ所の渡河点（キエフ、カネフ、チェルカッスイ、クレメンチューク、ドニエプロベトロフスク、ザポロジェ）をめざして後退していたが、その間隙をぬってソ連軍部隊も河畔に急いでいた。

後退中のドイツ第4機甲軍、第8軍の間をソ連のパットン＝猛将リュバルコの第3親衛戦車軍のT-34部隊が前進を続けていた。9月21日、その最先鋒の第51親衛戦車旅団は、キエフ南方90kmのグリゴロフカ村近辺のドニエプル河畔に達した。

「泳いでも、すぐに渡河するのだ！」——リュバルコの敵命をうけて、同旅団のシナジュキン上級中尉いる機械化狙撃兵中隊は、木ぎれを打ちつけた筏や漁師の

ソ連軍は圧倒的な兵力で、ドイツ軍をドニエプル川まで追いつめていった



攻撃をかけるドイツのスツーカ急降下爆撃機

小舟ののって9月22日早朝、渡河を敢行した。

この時点でほとんど部隊を対岸に配備していなかったドイツ軍側は、大騒ぎとなった。何しろ、8月半ばまでドニエプル河畔での防禦陣地構築をもヒトラーが禁止していたため、渡河を防ぐことも、渡河後のソ連軍の行動を妨げることもまったくできなかったからだ。

ドイツ第8軍司令官ヴェーラー大將は、カネフ地区に後退中の第24機甲軍団（ネーリング中将）に対して警報を発した。「急いで渡河し、西岸から機動攻撃をかけてソ連軍を追い落とすのだ！」。

しかし、同軍団が到着するまでにソ連軍は続々渡河し、グリゴロフカの小橋頭堡は、次第に規模が大きくなった。ネーリングの機甲軍団の先鋒部隊がやっとカネフの鉄橋にさしかかろうとした9月22日夜7時半、同じ鉄橋をめざしてリュバルコのT-34部隊3コ中隊が突進してきた。ドイツ軍側は、鉄橋を守るドイツ第34歩兵師団第253連隊の75mm対戦車砲数門の砲火と、密着地雷を使用した歩

兵の肉迫攻撃でかろうじてこれを撃退した。

引き続きソ連軍が鉄橋を狙っているのが明白だったので、ネーリングは全軍団に「急ぎ鉄橋を通過せよ」と厳命した。ドイツ第24機甲軍団は、それから13時間半で全部隊をドニェプル西岸に移動させ、鉄橋を爆破した。

同日、キエフ北方からザポロジエにいたる700kmの河畔のあちこちで、ソ連軍は渡河を敢行した。ドイツ軍側は驚愕した。渡河用の工兵資材をろくに持たないソ連軍が、急速に大河ドニェプルを渡るとは考え得なかったからだ。しかし、戦闘練度が明白にドイツ将兵より高くはないソ連兵たちはやってのけた。パルチザンの協力、あるいは伐採した丸太をくんだ筏や小舟で…。ドイツ軍とはまったく異質の「優秀性」を示したのだ。

ドイツ軍、ドニェプル西岸で苦戦

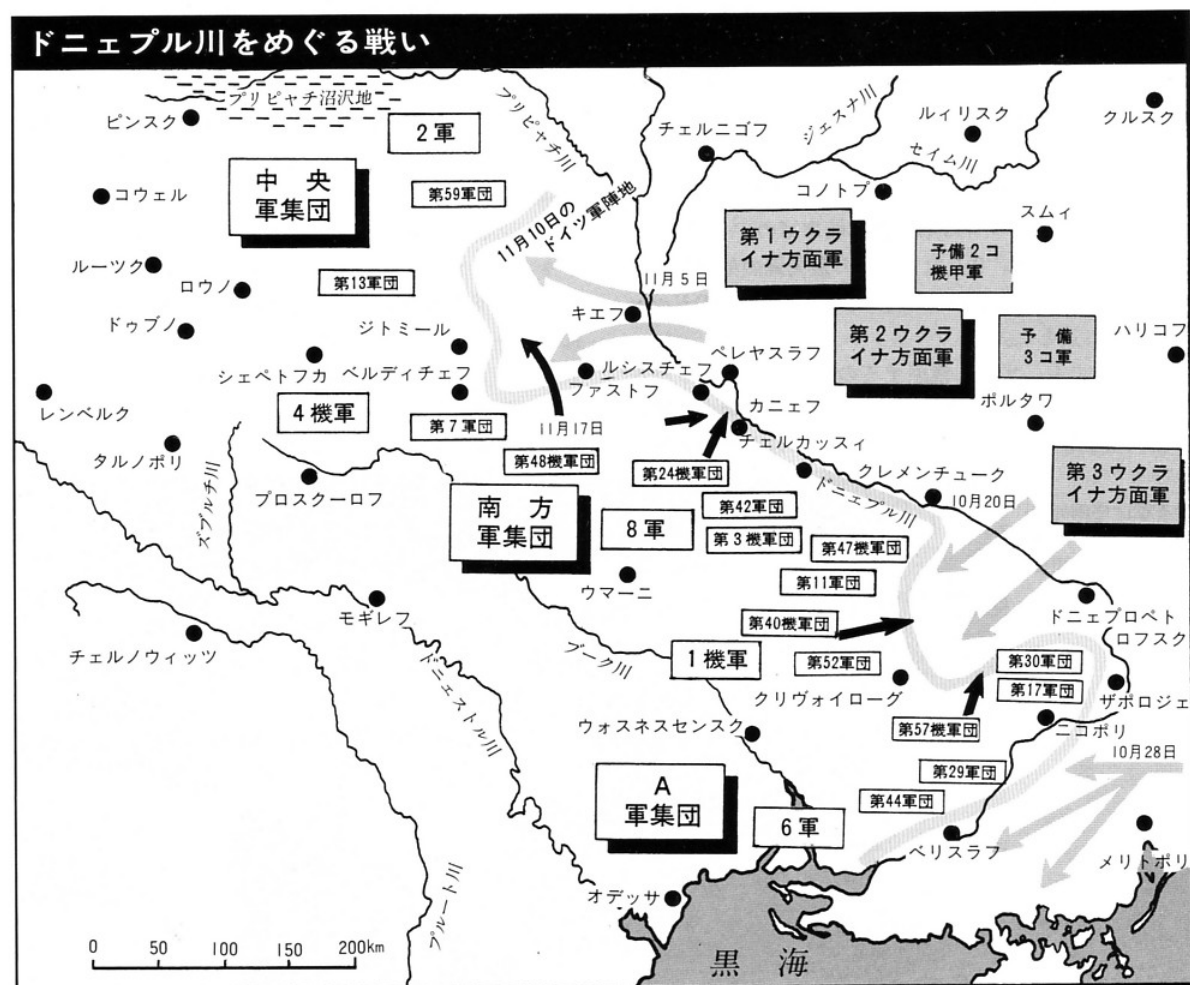
グリゴロフカ村にシナジュキン上級中尉率いるソ連自動車化狙撃兵中隊が築いた橋頭堡を、ソ連側は「ブクリン橋頭堡」と名付けた。キエフまでわずか90km——ジュー

コフ元帥は、ここから大軍を渡河させ、一気にこのウクライナの首都を奪回するつもりだった。

ドイツ側もこの危険に気づいていたため、周辺部に散在していた兵力をかきあつめ、ただちに反撃した。はじめは南方軍集団武器学校学生120名、次に懲罰中隊警備隊…。しかし、ドニェプル西岸の切りたった高い岸辺にとりついたソ連兵の銃火は、これらの反撃をまったく寄せつけない。岸に向かってひろがった草地を突撃するドイツ兵たちは、高台のあちこちにある窪みに隠れた少数のソ連兵が操作するマキシム重機関銃や、デグチャリョフ軽機関銃の掃射で何度もなぎたおされ、撃退された。

ドニェプルの西側の岸は、水面から約30mも切りたった崖となっており、ドイツ側から理想的に渡河点を守っていた。カノン砲弾も着弾させられない。もし、ヒトラーが早期に沿岸の防禦陣地構築を承認していたら、この崖はソ連軍の渡河作戦を封じる「天然の要塞」となったに違いない。マンシュタインは、ホゾを噛む思いだった。

ドニェプル西岸への撤退に成功したドイツ機甲部隊は、





ソ連軍を迎え撃つべく配置につく IV 号戦車 H 型

あちこちにしみのように広がるソ連軍の小橋頭堡つぶしに奔走した。そして、いくつかの橋頭堡を蹂躪し、ソ連軍を川の向こうに押し返しすらしめたが、ブクリン橋頭堡を粉碎することはできなかった。

9月24日、ソ連軍はさらに驚くべき作戦を展開した。同夕刻、ブクリン橋頭堡西方および南方カネフ周辺に3コのパラシュート兵旅団を降下させたのだ。戦闘機に護衛された数百機の輸送機に乗った第1、第3、第5降下兵旅団は、渡河中のドイツ軍背後に降下して、リュバルコ戦車軍と協力してこれらを粉碎し、ブクリン地区に大規模な橋頭堡をつくることを狙っていた。

しかし、ドイツ機甲部隊の行動は、ソ連側の予想を上まわる迅速さであった。無人と思われた降下地点には、ドニェプルを渡河したソ連軍を迎え撃つために移動中のドイツ第19機甲師団、第10機甲擲弾兵師団、第34、第57歩兵師団の戦闘グループが充満していた。

このため、ドイツ軍の対空砲火で低空を飛行中のソ連軍輸送機の多数が撃墜され、降下した約7000名のソ連パラシュート兵も降下中か降下直後にほとんどが射殺されるか、捕えられた。降下作戦は、完全に失敗した。

ドイツ側には、ほとんど損害が出なかったが、南方軍集団司令部はこの大胆な行動にショックを受け、ブクリン地区に戦力を集中させる措置をとった。マンシュタイン元帥は、「ソ連側の意図は、ここからリュバルコの戦車軍を突破させ、キエフを南方から奪回することだ」と判断したのだ。

＋ドニェプル湾曲部に目を奪われるドイツ軍

しかし、ドイツ南方軍集団のさらに南翼地区も風雲急

を告げていた。ザポロジエ〜メリトポリを結ぶ「ヴォーダン陣地」に向けても、ソ連南方軍が猛攻を加えていた。アゾフ海沿いにモルチナヤ川沿岸の同陣地まで後退してきたドイツ第6軍部隊は、押し寄せるT-34戦車群をかるうじてささえていた。

ドニェプル湾曲部先端に飛び出したザポロジエ橋頭堡は、特に激戦の焦点となっていた。同地には、大河ドニェプルを堰き止めて建設された大ダム＝レーニン発電所がある。1941年にソ連側が破壊したものをドイツ側が再建し、周辺地域の工業都市や鉱山に電力供給し、ドイツの戦争経済をささえる上で大きな貢献をしていた。

ザポロジエの背後のドニェプル川沿いには、ニコポリのマンガン鉱山、内陸にクリヴォイ・ロークの鉄鉱山などの豊富で貴重な金属資源があり、ヒトラーは、「戦争経済上、何としても死守するのだ」と厳命していた。

「ザポロジエは、何としても守らねばならん。ドイツ戦争経済の将来はこの地域にかかっている。さらにクリ

パンツァー・シュレккеを用いて訓練中のルーマニア兵





◀ソ連軍は、ドイツ軍後方に空挺作戦を行なうといった、大胆な行動をとり始めた▼ドニェプル川を渡河するソ連軍。川の対岸には、標識に書かれている目標・キエフがある

ミア半島の第17軍との連絡を確保する上でも、ルーマニア、ブルガリア、トルコの態度を左右するという重大性からも……」。

またしても「政治的」、「戦争経済的」利益という目標が「死守命令」のバックボーンとなった。しかし、現地のドイツ部隊にとってはあまりに重い命題であった。ろくな補充もなしに数百kmもの後退戦を戦って、やせ細ったドイツ軍が直面しているのは、戦力の上で今や10倍にも達するようなソ連の戦車、歩兵、砲兵の群れである。

ザポロジェ橋頭堡のドイツ第40機甲軍団（ヘンリーキ大将）は、しかしながら健気に戦いぬいた。特に活躍したのは、フォン・ユンゲフェルト中佐の第656駆逐戦車大隊（フェルディナント自走砲を装備）と第216突撃戦車大隊（47輦のブルムベア150mm自走榴弾砲を装備）であった。同部隊は、9月末～10月初旬にかけて、スターリングラード防衛の英雄＝チェイコフ大将のソ連第8親衛軍がくりだすT-34戦車の数波におよぶ攻撃を正面からうけてたち、数百輦を撃破した。

しかし、マリノフスキー大将のソ連南西方面軍は際限なく新手の戦車部隊、歩兵部隊をおくりこんでザポロジェ陣地にぶつけてきた。10月10日、スターリンの厳命をうけた同方面軍は、全軍をもって総攻撃に出た。初めて実戦に登場したソ連独立砲兵師団数コが参加し、カチューシャ・ロケット砲、重砲、迫撃砲を大量に投入してドイツ軍陣地に猛砲撃を加えた。

その後、3日間にわたる攻防戦の中でブルムベアの150mm榴弾砲とフェルディナントの88mm対戦車砲は、砲身も焼けよとばかりソ連戦車を叩き続けたが、陣地内のドイツ歩兵はどんどん減り、ついにソ連歩兵の浸透を阻止しえない状況になってきた。

ヘンリーキ軍団長は、10月13日、ついに撤退を独自に決断、主力部隊を渡河させ、巨大なダムと発電所を爆破した。残余の後衛部隊は、工兵の強襲艇やフェリーです



みやかに後退させた。

ザポロジェ陥落後も、ドイツ指導部は「ヴォーダン陣地」固守のため戦力をつぎこみ、後退しつつ激戦を重ねた。しかし、戦力差と防衛しづらい地勢（ノガイ草原）のため、トルブーヒン大将のソ連第4ウクライナ方面軍（10月20日に南方面軍から改称。以後、ヴォロネジ方面軍が「第1ウクライナ」、ステップ方面軍が「第2ウクライナ」、南西方面軍が「第3ウクライナ」の各方面軍に呼称が統一され、終戦まで用いられた）の突進を止めることができず、10月いっぱいから11月にかけてクリミア半島の入り口部分はほとんど制圧されてしまった。

しかし、あいかわらず「クリミアへの連絡の回復」と「ニコポリ、クリヴォイロークの鉱山資源の確保」のための激闘が、ドニェプル湾曲部で1944年2月まで続けられた。マンシュタイン元帥もクリミア半島の第17軍の運命をおもんばかったことから、「ドニェプル湾曲部防衛」のヒトラー戦略に反対せず、協力した。

後に元帥は、①湾曲部防衛は、戦線を長くしたため各軍の負担を大きくした上、ソ連軍突破に備えた機動予備の創出を困難にした。②従来から「北翼からのソ連軍突



破・包囲の危険」を自分が指摘してきたにもかかわらず、湾曲部防衛に目を奪われたためキエフ周辺の軍集団北翼の防備が手薄になった、という2点を判断上の誤りとして反省している。特に2番目の誤りは、「ソ連軍のキエフ攻撃はブクリン橋頭堡から」という判断とともに重大な危機を招いた。

「革命記念日までにキエフを奪回せよ！」

ブクリン橋頭堡前面では激闘が続いていた。ドイツ側は精鋭第48機甲軍団（クノーベルスドルフ将軍）と第24機甲軍団を投入して、ルィバルコ戦車軍の動きを封じようと懸命になっていた。

9月30日、ブクリンより125km上流のドニエプル河畔リュテジ村では、ドイツ側の不意をついて築かれた橋頭堡がどんどん拡大されつつあった。9月26日、モスカレンコ中将のソ連第38軍の先鋒第240狙撃兵師団のうちのたった1コ小隊が上陸した同地には、さらに師団の主力2コ連隊、砲兵隊が渡河し、幅3km、奥ゆき1.5kmの根拠地が形成されていた。同橋頭堡に対するドイツ軍の反撃は、まったく不調に終わっていた。

図作戦程度に考えていたヴァツーチン大将は、思いも寄らぬ小さな成功に注目し、10月3日、ただちに後方に予備として控置していたクラブチェンコ中将の第5親衛戦車軍団を同地に渡河させ、ドイツ側の本格的な反撃に備えた。

ドイツ第4機甲軍司令官ホト上級大将の命令でリュテジ反撃に出たハウフェ将軍の第13軍団は、クラブチェンコ戦車軍団のT-34によってあえなく撃退され、以後リュテジ橋頭堡は数次のドイツ軍の反撃にもこたえた。

10月半ば、ソ連大本営代表ジューコフと第1ウクライナ方面軍司令官ヴァツーチン、同方面軍軍事会議委員フルシチョフは、リュテジ橋頭堡からキエフ奪回の主力攻勢を行なうことに方針を変更。10月25日にブクリン橋頭堡内の第3親衛戦車軍と砲兵戦力の主要部分に対して、リュテジ橋頭堡への配置がえを命令した。

ルィバルコ中将は、ニセ通信などあらゆる手段を駆使して隠密裏に戦車、砲兵部隊をブクリン橋頭堡から撤退

させ、ドニエプル東岸沿いに夜間移動し、11月1日に再度ドニエプル西岸に渡河してリュテジ村に到着した。

スターリンは、第1ウクライナ方面軍に打電した。「11月7日の十月革命記念日までにキエフを解放せよ！」。

11月3日、リュテジからキエフに向けた総攻撃が開始された。ソ連第7突破砲兵師団を中心とした2000門の重砲、500門のカチューシャ・ロケット砲が早朝、いっせいにドイツ軍陣地に向けて火を吹いた。

クラブチェンコ少将の第5親衛戦車軍団を指揮下においたソ連第38軍司令官モスカレンコ中将は、「キエフへ突撃せよ」と全軍に命令した。キエフ防衛のドイツ軍は第88、第68、第208の3コ歩兵師団。これらの陣地に鉄の雨が降り、6コ狙撃兵師団と数百輦のT-34戦車からなるソ連軍が殺到したのだ。砲兵がうちもらしたドイツ軍の抵抗拠点を、ソ連第3航空軍のイリュージン2型「シュトルモビク」襲撃機が低空から小型爆弾、機関砲で破壊した。

ドイツ第4機甲軍は、第20機甲擲弾兵師団と第8機甲師団を投入して反撃したが逆に撃退され、この日のうちにソ連軍の突破口は幅10km、深さ7kmにまでなってしまった。精鋭の第7機甲師団の反撃で、ようやく一時的にソ連第38軍によって「解放」されたキエフ市





奮闘もむなしく、ドイツ軍の東部戦線南翼は崩壊した

連軍の進撃は食い止められた。

しかし、翌4日夕刻、キエフ市北部に向けてリュバルコ中將のT-34戦車群がサイレンを鳴らして突進を開始、これを機にドイツ軍防衛線はいっせいに崩れた。消防用サイレンを戦車に積んで鳴らしたリュバルコの「子どもだまし」のようなアイディアは、大軍相手の戦いで神経が限界まで張りつめていたドイツ歩兵にパニックを呼び起こし、効果てきめんであった。ソ連第3戦車軍は、キエフを迂回して前進を続け、コロステン、ジトミル方面をめざした。

キエフ市街に突入したソ連第38軍部隊は、11月6日、全市の掃討を終了した。解放された市街はほとんどが废墟で、住民は少数しか残っていなかった。さらに市郊外からは恐るべき悪臭を放つ黒煙があがっていた。ドイツ

「特別コマンド」が焼き残したバビヤール虐殺のユダヤ人数十万の死体が、まだ燃え続けていたのである。

✦補給・後方組織の建設に成功したソ連

東部戦線南翼をめぐる戦いは、1943末～1944年初旬にかけて激しく続いた。ジトミルの争奪、ニコポリ、クロヴォグラードの攻防、チェルカッシーの包囲戦…。

1943年を振り返ってジューコフは、「腹立たしい失敗と大きな成功の繰り返しで、心身ともに消耗した」と後年述べている。戦術的力量はドイツ軍側に利があり、ソ連側にとって戦闘は常に人命と兵器の多大な消耗を覚悟せねばならなかった。

しかし、それでもすぐれた将星マンシュタイン率いるドイツ南方軍集団をウクライナの主要部分から撃退しえたのは、大損害を急速に回復させる力量をもった軍需産業復興の成功と、後方輸送システム確立のおかげであった。他国にあっては、兵站は参謀部の一部局の仕事にすぎなかったが、ソ連は1941年の痛苦の教訓から軍需産業再建と鉄道・道路輸送、軍への補給部門を参謀本部とは独立した一部門に統合し、最高権威をもたせて監督した。

戦後、ソ連政府の重鎮となるミコヤン政治局員とフルリョーフ大將がその責任者となり、43年までにウラルへの疎開企業の再開、奪回地での迅速な鉄道・道路の再建、各戦線への軍需物資補給のすべてを有機的に組織化することに成功したのだ。これにアメリカ等からのレンドリース物資も流れこんでいたのだから、ドイツ側には太刀打ちのしようがなかった。

キエフ陥落後、ドイツ南方軍集団は積極的作戦の能力を回復できなかった。そして、戦術的には輝く武勲を何度もあげながらも、それを大きな勝利につなぐことはもはやのぞむべくもなかった。

東部戦線南翼の戦い以降、ソ連軍はまさに濁流となってドイツ軍を追いつめていった

